

思いつくまゝに

(島根) 山陽榮市

去る五月下旬、西部社会学会が松江で開かれた際、喜多野教授一行を案内して、宍道湖の西端要伊川下溝、出東村(全国屈指の米作村で現在斐川村に属する)に行つた。私自身前からこの村の調査に着目していたが、その時の話し合いから、この村を是非集中的にやつてみたいといふ理由はこうである。元来この附近一帯は、山陰で最も保守的な水田單作地帯であり、他の地方で共産党や社会党の投票数がふえても、こゝでは却つて保守党がのびるといった工合であつた。宗教形態をモラニカルの面からみて極めて固陋的であると考へられてゐた。然るにこの農村が、宍道湖に近い新田部の土地改良(漫田の乾田化)や機械力の導入等によつて、急速に新しい農村に変貌しつゝあり、この刺戟をうけて日和見主義を持っていた本田部の農民達も、ようやく目覚め始めてきたといふことである。典型的な農業改良に染出したのであるうか。そしてこのよくな農業改良した農村社会をどうのうか。

このように、農政との関連において村落社会を研究することの重要性は、福武直や内山政照も強調していられる(村落研究の成果と課題)特に上からの農政でなく、もり上る農民の意識を地盤とする、いわば下からの農政をふまえて、農村社会改造のチカラとなる力を手している。

このように、農政との関連において村落社会を研究することの重要性は、福武直や内山政照も強調していられる(村落研究の成果と課題)特に上からの農政でなく、もり上る農民の意識を地盤とする、いわば下からの農政をふまえて、農村社会改造のチカラとなる力を手している。

同じじて、村落の社会学的研究には、対象的に種々のアプローチの仕方がある。地主小作関係を通じて、労働力・人口の移動を通じて、階層分析を通じて、或はリダーシップの交換交替現象を通じて等々。併し、何れのアプローチによるとしても、それを中軸として他のものもろの社会現象に連関せしめつゝ、全体的認識を追究しなければならない。そのような連関はいかにして展開されるべきであるか。併し、何れのアプローチによつて、そのことを明らかにしてもらいたいと思う。

また農地改革後、大きな変動を遂げつゝある農村社会を、いかなるアプローチによつて追求することが、社会学的に最も望ましいか。たとえば福武直の「べおられるよう」に「地主や小作關係の大いに大きな変動を遂げつゝある」とられた類型的な村落構造は十分にとらえた。

「とがない」(前掲書五二頁)といふ。然りとすれば、どのような角度から類型論を構成すべきであるか。このような基本的なテーマについて、村研の大会で、気楽に思う存分語り合えたならどんなか稗益されるところが大きいであろう。本年度の課題「農家人口の変動と家族の構造」——このアプローチも究明するところ、村落社会の全体的認識を目指す一つの通路としてのみ研究され討論されるべきであると思ふ。